

さあ、自助の精神を取り戻そう！

あなたの人生の進路は、あなたの自助で歩むもの。
決して福祉国家の虜囚になることなかれ！

～～ はじめに ～～

この『美德冊子』は、

「品格とは何か？」

「美德（ある自由）とは何か？」

「人生において、なぜ**自助の精神**が重要（必要）なのか？」

等々を、老若男女の読者の皆様に**再考**して頂く**きっかけ**を提供するために、**私**〔=**ブログ作成者**〕が過去の名著の中から**美德論・保守（自由）哲学**などを引用し、短編に再構成した『**美德冊子**』である。

私〔=**ブログ作成者**〕は、この『**美德冊子**』を（**美德の義務の重さ**から逃避せずに）最後まで読み切った読者の皆様の多くが、これ

までの**人生観（価値観）**を僅かでも**前向きに良好に好転**させる**きっかけ**となることを切に願うものであります。

なお、この冊子のベースとして部分的に引用させて頂いた**サミュエル・スマイルズ『自助論--西国立志編』**の現代語訳は、（**中村正直**=訳／**渡部昇一・宮地久子**=現代語訳 版）であることを申し添えさせていただきます。

また、各パラグラフの番号および表題は、引用部の内容に合わせて**私〔=ブログ作成者〕**が熟慮して付したものであり、**中村正直**のもの（および上記、現代語訳版）とは必ずしも一致しておりませんのでご注意願います。

それでは本編に入りましょう。

~~~~~

## 本編

### No.1 自助の精神「天は自ら助く者を助く」

「**天は自ら助く者を助く**」という諺は、経験上確かな**格言**である。

たった一句の中に、すべての人類の成功と失敗の経験を包含している。

**自分自身を助ける**というのは、よく**自立**して、他人の力に**頼らない**ということである。

**自助の精神**は、人間の**才智**が生まれてくるための**根源**である。

・・・**自助の精神**が備わった**国民**が多ければ、その**国家**は必ずや活気に満ち、**精神**も強く盛んになる。

☐ **福沢諭吉**曰く、「独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なきをいう。」

## No.2 国家の衰退の原因は、**国民の品性**の衰退にある

**国家の発展**は、国民各自の**勤勉**の力と**真面目な行い**とが総合して現われるものである。

**国家の衰退**は、**国民各自**が怠慢で利己的になり、悪行が積み重なった結果である。

・・・人間についてのあらゆる事柄は、すべて人々が**自分自身を管理**し、**自分自身の主人**となるかどうかにかかっているのである。

従がって、利己心や邪悪な心に使われている者をこそ、本物の奴隷と名付けて当然である。

(露) **ベルジャーエフ**曰く、「人間の真の解放(自由)は、外的(他者による)

奴隷状態からだけではなく、内的（＝精神の）奴隷状態、自分自身に対する奴隷状態、自分のもつ**情欲**、**劣情**（低級自然の野蛮状態）からの人間解放（＝克己）を前提としている。」

### No.3 勤勉で忍耐強い人が文化を創る

あらゆる国が今日のような状態に至ったのは、どの国も**多くの時代**、**多くの世代を経て**、人々のある者は**智慧**を絞り、ある者は**肉体**を酷使してそれを成し遂げたからである。

・・・**勤勉**に学ぶ人が**絶え間なく継承**することによって、初めは混とんとしたもののから糸口を見出し、**秩序**を定めていったのである。

したがって、今の世の人は、**祖先の知的勤労**によって**学術の財産**を伝授されたのであるから、これを**改良**し明らかにして、**後世の人に遺す**べきである。

 **バーク**曰く、「われわれの**自由**を主張し要求するに当って、それを**祖先**から発して**我々**に至り、更には**子孫**まで伝えられるべき**限嗣相続財産**とすること、また、この王国の民衆にだけ**特別に帰属する財産**として、何にせよそれ以外の**一般的権利**（人間の権利）や**先行の権利**（自然権）などとは決して結び付けないこと、これこそ、**マグナ・カルタ**（1215年）に始まって**権利の章典**（1689年）に至る我が**憲法（国体）**の不易の方針であった。」

(露) ヘルジャーエフ曰く、「**所有権**は、その本質上、非物質的な**精神的原理**である。所有権が前提とするものは、物質財の消費だけでなく、**家族**や種族内での個人のより安定した**継承的な精神生活**である。**所有権の原理**は、また**祖先**に対する**関係**とも結びついている。**所有権**は**父子の具現した結合**である。自分の**所有権**を**子、孫、曾孫**に移譲する父の権利は、**愛情**と、物質的に記念された**結合行為**のあらわれである。」

#### No.4 国民一人一人が、美德に生きる価値を有している！

イギリス国民は**自助の精神**があつて、彼らが**活力**を奮い起こし、あらゆる物事に**励む**ことは、**昔から慣わし**となっていた。

一般民衆の中から身を起こして有名になり、生れながらに身分の貴い人を超えるものは、いつの時代にも必ずいるのである。

そしてイギリスの活力は、実にそれによって生じているのである。

・・・歴史書の中では大きな戦争について記されているが、**将軍の名前**だけがあつて、**歩兵の名前**は見当たらない。

しかし、歩兵の一人一人に**英雄の資質**があつて、懸命に戦つたことによって、**勝利**を得てきたのである。

国民の生涯も歩兵の戦闘にたとえられるべきである。

その姓名が後世に伝わっていない者であっても、伝記に名前を留められる偉人豪傑たちと共に、**世界の文明の繁栄と進歩に貢献**している事例は非常に多いのである。

最下層の人々であっても、**自ら職務に励み**、日常の行いが**正直**で、**忠義**に厚く、**実直**であり、他人の**お手本**となるならば、その国の政治を補う働きは、ただ当世だけではなく**後代までも及ぶ**はずである。

なぜならば、一人であっても、その人の行いが**善良**であれば、自然と**他人に影響**し、その模範をお互いに**お手本**とし合っ**て、後の世まで広く行われる**ようになるからである。

## No. 5 貧困と苦難は乗り越えられる

科学や文学の大家、大志を抱いた伝道師、および愛情にあふれた貴族たちは、もともと定まった地位の出身ではなく、限定された階級の出身でもない。

**彼らはすべて**、ある人は**学校から**、あるいは**工場から**、あるいは**農家から**、あるいは**貧民の粗末な小屋から**、あるいは**貴族の大邸宅から**出ているのであって、出自に区別があるわけではない。

有名な伝道師となった者でも、軍の一兵卒から出世した者もある。

思うに**貧困と苦難**の二つは、**決して人の進路を妨害するものではない**。

なぜならば、最も貧しい階層の人が、時として最高の地位に就くことがあるからだ。

また、乗り越えられないような困難があるとしても**最終的には**その邪魔をするものを**除き去って**、必ず順調に進む路を得るのである。

また、それだけではなく、困難は常に**労苦に耐える力**を引き出し、**非凡な才能を生みださせるもの**となるので、**最良の援助者**と呼ぶことができる。

昔から障害を乗り越えて功績を手にする例が大変多いということを観察するならば、「人間は、一つの**志**によって万事を成し遂げられる」という諺が誤っていないことを知るのに十分である。

## No.6 努力の習慣化が一流への道

よく工夫をして、**習慣**という性質を身につけることは、どのような**学問**をするためにも大変重要なことである。

それをいったん身につけてしまえば、その後に行う仕事が大変たやすくなることを知っておくべきである。

何事であっても、**反復に反復を重ねる**べきである。

書物を暗誦するような場合は、何回となく十分に**反復**するのである。

そうすれば、最初のうちは大変困難であっても、**努力**を続けるにしたがって

自然と習慣となりだんだんに簡単になるのである。

No.7 努力（美德）の報酬は、自分の生涯の内に、家族の生涯の内に、あるいは後世の子孫の生涯の内に必ず現われる---目前の悪い結果のみに惑わされ、希望と勇気を失ってはならない！

世の中に貢献しようと願って働く人は、特に長い時間を耐えて働かねばならない。

なぜならば、労働の報酬や何かを成就した時の喜びは、すぐ目の前には見えないからである。

撒いた種子が厳冬の雪や霜の下に埋もれていると知っていても、もしかすると、農夫は春が来る前にこの世から去ってしまうかもしれないのである。

世の中のために貢献しようと仕事を引き受ける人で、自分が生きている時代に自分の志が成就するのを見ることが出来る者もいれば、見ることができない者もいる。

ローランド・ヒルは、安価で郵便物を国中に配達できる制度を作った人物であるが、生きている間に自分の志が達成されるのを見た。

しかし、アダム・スミスは長年グラスゴー大学で働いて『国富論』を著したが、70年も後になってから彼の著書は初めて実を結び、人としての正しい道と

**福祉**のためになったことが判ったのである。

 ミルトン・フリードマン曰く、「**アダム・スミスの《見えざる手》**は、財やサービスを通貨との交換において売買するという経済活動の分野にだけ関係したものでしかないと、一般に考えられてきた。しかし決して、経済活動だけが人間の生活のすべてであるわけではない。人間生活においては、その他の多様な活動においても、多数の人びとがそれぞれに自分の利益を追求しているのに、相互に協力し、**まったく意図しなかったひとつの複雑で精妙な構造（=秩序）**を結果的に生み出している。」

## No.8 本物の知識、本物の謙虚さとは

ある種の人たちがいる。

多くのことを知っているが、それはただ表面的なことだけであって、とうてい一つのこととも熟知していない者たちである。

そのような人は、自己満足して自分の才能を鼻にかけたがるのだ。

しかし、賢明な人は自分を謙遜して、「**およそ自分が知っていることは、まだ知らないことでもある**」と思っている。

そのため**ニュートン**は、「私の**学問**は、ただ海の浅瀬にいて貝殻などを拾っているだけである。**真理の大海**は広々として**果てがない**。それはすべて、いまだ

研究されていないものである」と言っている。

## No.9 骨折り仕事の積み重ねなくして非凡な事業は成就できない

人というものは、ただ**骨折りの仕事**によつてのみ非凡な事業を成功させることができる。

**アディソン**は、「スペクテーター」誌を創刊する前に、大判本の**写本三冊**を資料のために蓄えた。

**ニュートン**は彼の『年代記』を書いたが、**15回**も原稿を書きなおした。

**ギボン**は彼の『自叙伝』を**9回**書き綴った。

**ヘイル**は長年の間、**毎日16時間**も法律を学んだ。

精神的に疲れた時は、**哲学や数学の勉強**をして気晴らしをしたと言われている。

**ヒューム**は、『英国史』を書いたとき、**1日13時間**も執筆に従事した。

かつて**モンテスキュー**は、自分の著書の一部分を友人に示して「君はこれをほんの少しの時間で読んでしまうだろう。

しかしながら、私がこの本に苦労したことといたら、**頭髪が白くなってしまったほどだ**」と言ったという。

## 「忍耐

今より百三十年程前に、**前野良沢**という医師ありき。このころは、西洋諸国との交通、おおむね、禁ぜられ、西洋の学芸を学ばんとするもの、きわめて、稀なりしが、良沢は知人のもてるオランダの書を見、それより、奮発して、オランダ語を学びたり。そのころ、**杉田玄白**という医師あり。オランダの解剖書を見て、その精密なるに感服し、これを翻訳せんことを志し、良沢にはかりしに、良沢は、玄白をはじめ、同志数人をわが家に集めて、これに着手したり。しかるに、いずれも、オランダ語にあさきこととて、一日に、一句も解し得ざりしこともあり、されど、よく、**忍耐**して、**勉強**せしかば、しだいに、解し得るようになり、**四年**の間に、草稿を書き改むること、**十一回**にして、ようように、できあがり、**解体新書**と名づけて、出版するにいたれり。わが国の医師、この書によりて、はじめて、人体の構造を、つまびらかに、知ることを得たり。

格言 点滴、石ヲウガツ。」

No.10 仕事の喜びは心の喜びであって、金銭は副次的であると考えべき

人が優秀であるという**評価**を得るのは、**幸運**や**偶然**によるのではなく、ただ

ただ**勤勉**であることによるのである。

もし芸術によって財産を得ることがあったとしても、財産を得たいという動機で芸術を学んだのではない。

**自制心**をもって**仕事に熱心に励む**ことは、金銭欲だけによって維持できるものではない。

ただその**仕事に打ち込む**ことに**面白さや喜び**があり、それによって**心が満たされる**のである。

従って、**喜び**とは仕事によって得られる**最善の報酬**なのである。

 **ウィリアム・J・ベネット**曰く、「幸福になるためには、やり遂げたときに**誇り**を感じられるような活動をするよ。そうすれば活動自体を**楽しむ**ようになる。楽しむことを、ただの気晴らしや骨休めや娯楽と同じ、と見るのは間違いだ。人生の最大の楽しみは、仕事を離れたところにあるのではない。人生における仕事にあるのだ。仕事の楽しみや労働の成果の喜びを知らない人は、**とても大切な何かを喪失しているのだ。**」

No.11 忍耐と勤勉せずして、自分に適した仕事（特技・趣味）も適した報酬も求めることなかれ！

少しばかりの困難に耐えられず、自ら志したことを回避する者は、良き師を

捨てて、好んで失敗する道を選択することになるのである。

ゆえにどんな課題であるかを問わず、**最初は忌避できないもの**であると考えて**一生懸命に実行すべき**である。

そうすれば、それは**楽しいこと**になり、自分から**進んでやりたく**なるものだ。

**勤勉**に意識を集中させることは、確かに最初は難しいが、次第に**習慣化**されてたやすくなるのである。

そしてまた、人がすべての意識を集中させて一時に一つのことに励めば、その人の才能が並であったとしても、一生の間に数多くのことを成し遂げられるはずだ。

 **ウィリアム・J・ベネット**曰く、「子供に、**忍耐**強く、自らを磨き、自分と他人を幸せにする**努力**の大切さを教えるために、われわれ大人はどんな激励の言葉をかけてやれるだろうか？子供たちのそばに立ち、ともに手をたずさえ、時には背後から見守ってやる。自分の経験に基づいて、教え導き、励ましの声をかけてやる、それが大切ではないだろうか。」

No.12 真に価値ある物事は勇氣によって成し遂げられる

真に**価値**があるものは、**勇氣**ある働きをしなければ成し遂げることはできない。

その**勇氣**ある働きは、必ずそれを成し遂げようと欲する**固い意志**から生じるものである。

見たところは達成不可能であるようなことも、そうして**可能になる**のである。

**熱心に思い描いて**、「こうなるように」と予め望んでいることは、将来、本当にその望み通りのことが実現することがある。

思うに、人間の**願望**が物事の成就の先駆けであると悟るべきである。

これに反して、臆病でためらう人は、「自分にはできない」と思うからこそ何一つ達成できないのである。

No.13 強い志とその努力は、謙虚と忍耐と寛容の下でなされる時、成就するものである

**意志の力**は、どんなことでも人が成し遂げようと願うことを成し遂げさせ、その人が到達したいと欲するところまで行かせるものである。

ある神学者は常に、「どんなことであっても、あなたが願い欲することは手に入るのである。人間の意志の力は神に通じて、それが成就しないことはない。

**しかしながら**、あなた方がまず**謙虚**であって傲慢にならず、**忍耐**強くして浮つかず、**ほどほど**であって過激にならず、**寛容**であって偏見を持たない人となる**努力**をしなければならない。

そうでなければ願った通りのことが必ず得られるとは限らない」と言っていた。

#### No.14 誠実正直であることが事業と国家の繁栄のもとである

古い諺に「**誠実正直**は処世術である」とある。

まさにこの言葉通り、日常生活において**正直**はあらゆる利益を生む源である。

・・・**言行が誠実で正直**であることは、一般に事業に携わる者の**土台**である。

その中でも特に、商人や職人が誠実かつ**正直**であることは兵士にとっての**誇り**と同様であり、キリスト教徒にとっての**慈悲心**と同様であり、**ほんの一瞬も忘れてはならないもの**である。

思うに、どのような卑しい職業であっても、**品行の正しさを鍛錬**するという目的があるはずだ。

・・・**高尚**な請負人は、自分が引き受けた**契約をまじめに遂行**することを**務め**としている。

**正直**な製造業者は、自分が製造した品物が**本物**であることによって、**名誉**や**名声**を得るだけでなく、**実質的な成功**を得るものである。

商人は品物を売る際に**正当**であって**詐欺がなければ**、**名声と利益の両方を同時に得られる**であろう。

## 尋常小学修身書

### 「良心

我等は何か**良い事**をすると、人にほめられないでも自分で**心嬉しく**感じ、また何か悪いことをすると、人に知られないでも自分で気がとがめます。これは誰にも**良心**があるからです。この**良心**は、幼少の時にはまだ余り、発達していませんが、**親**や**先生の教**〔おしえ〕を受けてしだいに発達し、善いことと悪いことの**見分け**がはっきりつくようになります。そうになると、人の指図を受けなくても、善いことはせずには居〔お〕られないように感じ、悪いことはすることができないように感じます。

我等は自分の**良心の指図**に従わねばなりません。人がみていないからとて、自分の**良心**の許さないことをしては、自分で自分の心を醜くすることになります。我等はよく**自分をつつしんで**、**天地に恥じないりっぱな人**にならねばなりません。**明治天皇の御製**に

目に見えぬ神にむかひ〔い〕てはぢ〔じ〕ざるは 人の心の**まこと**なりけりとあります。』

 **ウィリアム・J・ベネット**曰く、「**正直**であることは、**人間らしく**、**純粹**で、**信頼**でき、**誠実**であるということだ。不正直であることは、偽り、でたらめ、偽物であり、空想に生きることだ。**正直**な人は自分も他人も**尊敬**してい

るが、不正直な人は自分も他人も十分に**尊敬**していない。**正直**な人は、開放的で、**信頼**にあふれ、**率直**で明るく光輝く人生を歩む。不正直な人は人生において日陰、隠れ場所、逃げ場を求め、どこか暗闇を必要とする。」

## No.15 人格は金銀よりも貴重な財宝である

**誠実**で**正直**な人は、詐欺や不正義を働く人のように急速に金持ちになることはできない。

しかしながら、その**成功**は**本物**でありしかも**堅実**である。

そのため一時的に失敗し困難に陥ったとしても、**誠実**で**正直**な**人格**まで失うことはない。

むしろすっかり何もかも失ったとしても、**自分自身の人格を守り通せ**。

思うに**人格**が**誠実**で**正直**であることは**ある種の財宝**で、**金銀よりも貴重なもの**である。

それゆえ、もし毅然としてそれを守り、一生を貫き通せば、幸運がやってくることを全く疑う必要はない。

 **バーク**曰く、「我々はともすれば事物を目に見える限りで考えやすく、それらをもたらし、そして恐らくは今も支えている原因の方に十分な注意を向けなさ過ぎる傾向があります。我々の**習俗**、我々の**文明**、そして文明や習俗と

結びついたすべての**価値**あるものは、我がヨーロッパ世界においては、幾世紀にもわたり二つの原則の上に立脚してきました。いやその二つが結合した結果でもありました。・・・**紳士の精神**と**宗教の精神**です。」

**パーク**曰く、「それにしても、**智恵も美德も欠いた自由**とは一体何なのでしょうか。それはおよそあり得るすべての**害悪中でも最大のもの**です。というのもそれは、**教導も抑制もされない愚行**であり、**悪徳**であり、**狂気**であるからです。」

(露) **ベルジャーエフ**曰く、「**経済唯物論**の部分的真理は、より以上深い観点から転倒することができる。すなわち、物質的生活は、**精神生活の派生**と解することができる。個人や国民の**精神的規律**の意義は、**経済**にとって大きい。

労働規律、労働組織、労働生産性は、**精神的要素に依存**している。結局において、精神は自然に打ち勝ち、自然の盲目力を支配する。自然力の体現、その組織と調節としての**経済は、人間精神の行為である**。故に**経済の性質は、精神の質に依存**する。経済は死的物質的自然現象ではない。それには**人間の精神的エネルギー**が浸透しており、人間と自然の合一、相互浸透を前提としている。**労働は、物質的現象ではなく、精神的現象である**。それは**精神的原理**をもっている。」

No.16 Providence (神の摂理) は「**儉約**」の意味でもある

どのような階級にあっても、その日暮らしをしている人は下級の人である。

このような人は貧困に陥り、自分自身を養うことができずに、社会の援助を受けるようになってしまう。

思うに、自分で自分を**尊敬**できない人は、他者から**尊敬**を受けることもできない。

・・・ブライト氏が 1847 年にロッチデールで労働者の集会に行ったとき、彼らを諭してこう言った、「人は誰しも、現在、幸いにも良い地位にあるならば、それを長く維持しようと願い、不幸にして劣悪な地位にあるならば、そこから抜け出そうと願うものである。

**そう願うならばこれ以外にない。**

**勤勉、儉約、節制、誠実である。**

この四つの**徳**を実践することによってそうできるはずだ。

この**徳行**がなければ、**精神的な充足感**や**身体の快適さ**を求めても、決して手に入れることはできない」と。

No.17 「マグナ・カルタ」を制定した人々の智恵と品格

**良書を読む**ことは**教訓**となり、**有益**であるけれども、**実際の経験**によって、あるいは他人の**善き人格**を**手本**にして、自分自身の**品格**を築き上げることは

まったく似て非なるものである。

例えば、イギリスにおいてまだ**学校**が創設されるずっと以前から**智慧と勇氣**が兼ね備わり、**誠実な心**を持った人が存在していたのである。

イギリス王の権力を**制限する法**、すなわち「**マグナ・カルタ**」の誓約書は、**大胆で認識力**ある人々が定めたものである。

ところが、彼らの中には自分の名前を文字で書くことができず、ただ記号を書き込んで署名の代わりとした者もいた。

彼らはそれまで本を読んだことがなく、まったく文字を判読できなかったが、その**内容の重要性**を理解し、**必要性を知って**、ついに制定して実施したのである。

このことから、**イギリス国民の自由**の基礎を打ち立てた人々は、無学ではあるが、**最高度の品格の人々**であったことを知らねばならない。

人間が**自己修養**をする主要な目的とは、本に書かれてある他人の考えたことをただ記憶し、自分の心の過去の言い伝えの倉庫とするだけではなく、自分自身の**能力を開拓**し、真に有用な人間となり、一生を無駄に過ごさないようにするためであると、**心に期すべき**である。

🇯🇵 中川八洋曰く、「**マグナ・カルタ**は、数百年後の**権利章典**や**王位継承法**を先取りして、**王位継承と自由**との**一体不可分の“法”**を制定法にしたものであつ

た。たとえば、マグナ・カルタ第 63 条は次のように定め、**臣民の自由**が《**相続される**》旨をはっきりと書いている。次に、**王位**も《**相続される**》ことが明記されている。同種のことは第 1 条にもある。

《**朕は、イングランドの教会が自由であること、ならびに朕の王国の内の臣民が前記の自由、権利および許容のすべてを、正しくかつ平和に、自由かつ平穩に、かつ完全に彼ら自身のためおよび相続人のために、朕と朕の相続人から、いかなる点についてもまたいかなる所においても、永久に保存保持することを、欲し、かつ確かに申し付ける。】**》

## No.18 困難は神から人に遣わされた厳格な教師である

**貧困**はたとえるなら**厳格な女教師**に似ている。

しかし、それは**最善の教師**なのである。

**逆境**は、かつて行われていた罪の有無を判断する水責めや火責めに似ている。

人はやはり尻込みしてそれを避けようとするものだが、もし**逆境**がやって来たならば、**毅然**として**勇気**を奮い、**それと戦わなくてはならない**。

**バーク**は言っている、「**困難**は**神**から**人**に遣わされた**厳格な教師**である。神は父母のように人を**守護**して下さり、人が自身を知るよりよく知って下さり、人が自身を愛するよりも深く愛して下さる。

そのため、**困難**という教師を人に授けられたのである。

自分と闘う相手は、自分の精神を強くし、自分の技能を磨くことを**助けてくれるもの**である。

自分に敵対するものは、自分の**助力者**なのである」と。

思うに、もし人が困難に遭ってそれと戦わなければ、人生はとても簡単なものとなるはずである。

しかし、**その人の値打ち**は下がるだろう。

No.19 晩年からでも学問の大家になれる---人生に「諦め」という言葉は不要である！

諺にはこう言われている、「人が**学問**をするに当って、『もう遅い』と言うべき時はない」と。

この言葉が**本当**であることは、**数多くの有名人たちの事例**を観れば分かるであらう。

ヘンリー・スペルマン卿は古物研究者であり、多くの著作があるが、**55、56歳**のときに学問を始めた。

電気の研究者であるフランクリンが物理学を始めたときは、**50歳**より後であったという。

詩人で文学者のドライデンとスコットは、どちらも **40 歳**になるまで作家として世間に知られていなかった。

イタリアの有名な作家であるボッカチオは、**35 歳**になって初めて文学に従事した。

イタリアの有名な詩人であるアルフィエリは、**46 歳**のとき、始めてギリシャ語を学んだ。

アーノルド博士は、**晩年**になってから初めてドイツ語を学んだ。

ニーブール〔ドイツの有名な歴史家〕の著作を原文で読めるようになりたいと思ったからだそうだ。

ジェームズ・ワットは、**40 歳**くらいのとき、グラスゴーに住んでいて、機械を造って生計を立てているときに、フランス語、ドイツ語、イタリア語を学んだ。この3つの国の機械学の本を読みたいと思ったからである。

トマス・スコットは、**56 歳**のとき初めてヘブライ語を学んだ。

ロバート・ホールは**老年**になってからイタリア語を学んだ。

ヘンデルは **48 歳**になってから初めて作品を公開したが、多くの素晴らしい曲を後世に遺した。

**晩年**になってから学習を始め、**専門家**にまでなった人の、その事例は**数百**にも上る。

従がって、「私はもう年をとってしまったので勉強することはできない」と言うのは、軽薄な人だけ、怠慢な人だけである。

## No.20 若いころの出来・不出来だけで将来は予測できない

世界を動かし、世界の指導者となる人は、生まれつきの**天才**ではなく、**不動の志と勤勉**の力を持った人である。

早熟な人も中に入るが、子供のときに聡明で利発であっても、成長してから、果たして偉大な業績を成し遂げられるかどうかは分からないものだ。

それだけでなく、子供が早熟であることはしばしば知的成長の徴候ではなく、大人になってから才能が後退してしまう前兆だということもある。

ここに一人の少年がいて、生まれつき利口で、学校で第一位の賞を得たことがあるとしよう。

もう一人の少年は、愚鈍で、最下位の順位であったとする。

この二人の生涯を観察してみると、愚鈍だった少年が、かえって利口であった少年を追い越して、成功していることがある。

昔も今もこのような事例は少なくない。

そのため、幼くして器用で利口であるからといって期待することはできない。

たとえ生まれつきの能力は愚鈍であっても、**勉強に励んで自分の最善を尽く**

し、課題をこなしてゆく者こそが、将来に希望の持てる若者なので、彼らこそ褒め称えて他の人のお手本とするべきである。

## No.21 家庭での教化は必ず天下国家に及ぶ

人は、目を通して知識を得ることが、耳を通す場合と比べて多い。

実際に目で見えて理解することは、ただ読み聞くものに比べれば、心に与える印象がはるかに深いのである。

特に、子供は目を知識の入り口にする。

彼らは見ることで無意識のうちに見習うものだ。

そのため、子供は大人たちの側にまとわりつき、一緒にいる人の見かけの様子に自然と似てくるが、それはまるで虫が自分の食べる葉の色に似てくるのと同じである。

従って、家庭での躰は最も重要なものであって、決していい加減にしてはならない。

もちろん、学校で教えることに全く効果がないとは言えない。

しかしながら、家庭における良い手本の感化力にはとうてい及ばない。

家庭の中の手本こそが、真に将来の大人たちの品格を形成する基本であるはずだ。

・・・思うに、**家庭は国家の核**である。

**家庭**の中で行われることが外に放出されて、**社会風俗**となり、**格言**や**主義**となる。

そのため、**私生活**の規範は同時に**国家**の法律であり、それぞれの**正・邪**、**純・不純**が反対になることはない。

ただ、多少の違いがあるだけである。

思うに**国家**は**家庭**のミルクによって生まれ、**慈善**を行い社会に利益をもたらす人は**家庭**の**暖炉**の側から現われてくるのである。

バークは言った、「人がそれぞれ自分の属する集団を愛することは、**国家公衆への愛情の萌芽**である」と。

まさにこの言葉の通り、**家庭内の愛情**は**円の中心点**のようであり、人への**共感**は**ここから始まって**、**周囲へと次第に広がり**、**慈愛の円がますます大きくなって**、**全地球を抱きしめるほどになるはずである**。

諺には「**慈悲喜捨の精神は家庭から始まる**」とある。

従って、その精神は**家庭**に止まらずに、必ず**天下国家**に影響を与えてゆくことを知らなければならない。

 いつも家族で応援しています！

頑張れ、アニメ『ちびまる子ちゃん』 and 『サザエさん』！



## No.22 祖先---現世代---子孫への永続性の思想が重要である

人は宇宙の中にあつて**独りで存在しているものではなく、互いに依存して関係し合うものの一部分**である。

人間の様々な行為によって、**人類全体の幸福**があるときは増え、あるときは減り、**永遠無限に影響**してゆくのだ。

**現在の人間の世界は、過去にその淵源がある。**

我われの**父祖の言行や手本**は、我われを感化して創り上げている。

この理論から推し量れば、我われが**今世**にあつて毎日行うことがまた**将来**の状況を形成し、**未来**の特徴を作り上げるものとなるはずである。

**現在**の人びとは、**数百年前**から培養されてきたものが**成熟した果実**である。

**言行や手本**というものは、磁流のように**過去は千年前とつながり、未来は千年の後にまで達する。**

そのため、人が死んでその身体は消えてしまい、土となり空気に混ざってしまったとしても、人の善悪の言行は**死なず消散せず**、**将来それぞれに果実となり**、**無限に伝わってゆく**のである。

そうであるならば、人が**この世に存在**することの**責任**の重さはどれほどのものであろうか。

その**関わり方**の大きさはどれほどのものであろうか。

それを考えれば、**謹み畏れ**、**恐ろしさ**を感じて戒めないではいられないであろう。

#### ● 尋常小学修身書

##### 「私たちの家」

**私たちの家**では**父は一家の長**として仕事にはげみ、**母**は一家の主婦として父を助けて家事にあたり、ともに**一家の繁栄**をはかっています。**父母**の前は**祖父母**、祖父母の前は**曾祖父母**と、私たちの家は、**先祖の人々が代々守り続けて来たもの**であります。先祖の人々が**家の繁栄**をはかった心持は、父母と少しも変わりがありません。私たちは、このように**深い先祖の恩**を受けて生活しているものです。したがってこの**恩を感謝**して、**先祖をあがめ尊び**、**家の繁栄をはかる**ことは、**自然の人情**であり、またわが国**古来の美風**であります。

昔、**大伴家持**は、

剣太刀（つるぎたち） いよよとぐべし いにしへゆ さやけく負ひて

来にしその名ぞ

とって、一族をさとししました。

また、**菅原道真**の**母**は、道真が十五歳になって元服した時に、**名誉ある父**

**祖の業**をついで、いっそう**家をさかんにする**ようにと、

久方の 月の桂も 折るばかり 家の風をも 吹かせてしがな

とよみました。

祖先に対しては、**祭祀を厚くする**ことが大切であります。そうしてよく**先**

**祖の志**をつぎ、**先祖ののこした美風をあらわす**ようにつとめなければなりま

せん。

一家の中で、一人でも多くよい人が出て、業務にはげみ、**君国**のために力を

つくせば、**一家の繁栄**を増すばかりでなく、また、**一門の名誉**を高めることに

なります。もしもただ一人でも不心得の者があって、わるいことをしたり、つ

とめを怠ったりするものがあれば、うち中の人に難儀をかけて、親類まで肩身

のせまい思いをしなければなりません。このように**一人のおこないのよしわる**

**しは、ただちに一家一門の幸不幸となり、先祖の人の名にもかかわる**のであり

ます。それゆえ、一家の人々は、みんな心をあわせて**家の名誉と繁栄**のために

力をつくし、**先祖**に対してはよい**子孫**となり、**子孫**に対しては、またりっぱな**先祖**になるように、**絶えず心がけ**なければなりません。」

最後に**私**〔=**ブログ作成者**〕から一言申し添えます。

読者の皆様、最後まで読まれてどのように感じられたでしょうか？

「自分が生きる」ということの具体的・現実的な本質を少しは感じる事ができたでしょうか？

文明社会の人間は国家・社会の中で他者（=祖先・子孫もすべて含む）との関係の中で生きる存在ですが、他者との関係は尊重しながらも、自分の目の前にある生の具体的現実（自分に固有の物的貧困や精神的苦難などを、国家や社会が知ることなどあり得ないことは自明でしょう。）を切り開いて前へ歩いて行くためには「自助の精神」に頼るしかないのです。

「国家（政府）が、あるいは我が党がすべての国民の人生の幸福を保障し、達成してあげます！」などという、社会主義的「福祉国家」や共産主義的「ユートピア」の全体主義的、抽象的観念論（=思い上がった虚構）によっては、個人の目前に存在する具体的な生の現実問題は何一つ解決されないのです。

さあ皆さん、自分の人生は自分の力で切り開いていけるように「自助の精神」を「取り戻そう」ではありませんか。

**(完)**

平成 25 年 7 月 15 日 (月)、兵庫県神戸市にて記す。

**By** エドモンド・バークを信奉する保守主義者。